

〈書評〉

壺イメージ療法
—その生いたちと事例研究—

成瀬悟策 監修

田嶋誠一 編著

創元社アーカイブス 創元社 2019刊

名著が復刻された。本書の冒頭で編著者の田嶋誠一氏が書いておられるように古書での価格が高い値段で取り引きされていた。評者は、「壺イメージ療法」が実効的で素晴らしく実践的という評判を耳にしていたものの、書店には見当たらず古書が高額な値段で出回っていたことから入手をためらって、今回まで手に取ったことがなかった。評者と同じ思いで、この時を待っていた専門職が多くおられるのではないだろうか。

評者は、できる限り短期間で効果的で効率的な心理療法の実践に強く興味を持っており、新しいアプローチにアンテナを張ってきた。正直なところ、次々と主に海外から紹介される「新しいといわれる心理療法」に辟易しつつあり、国内外を問わずどのように心理療法が誕生して流布していくのかに加えて、アプローチがどのように機能し有効となるのか仕組みを探究することに関心の比重が移りつつある。日本で開発された「壺イメージ療法」は、編著者の臨床実践の中で、クライアントが壺を自発的に思い浮かべたことが面接展開の契機となったという。着想の源がクライアントが持ちこんだ事象であり、それに気づいた編著者の視点・態度が大きな意味を持っていると思われた。

「目次」や「序：壺イメージ療法シンポジウムに寄せて」「編者はしがき」から本書は、第1部「イメージ療法と壺イメージ療法」、第2部「事例篇」、第3部「コメント篇」の三部構成になっており、編著者・創始者の田嶋誠一、監修・司会の成瀬悟策、事例発表が伊藤研一、栗山一八、富永良喜、松木繁、討論者が倉戸ヨシヤ、栗山一八、中井久夫、増井武士、村瀬孝雄(以上、敬称略)といった臨床心理学や精神医学、催眠学における錚々たる方たちが一堂に集まって1984年11月3日から4日に開催された研究会の記録が元になっている。本書の企画は、執筆者の中に鬼籍へ入られた方もいらっしゃり、一期一会の歴史的なビッグ・イベントであったことが伺える。

「復刊にあたって」では、1987年本書刊行後の編著者の臨床実践の展開が示されている。壺イメージ療法を用いるなど個人を対象にした「内面探求型アプローチ」、続いて「ネットワーク活用型アプローチ」、そして「システム形成型アプローチ」と呼称が変わっていったことを述べている。前のアプローチを否定したのではなく、包含して展開していると強調している。本書に端を発する編著者のキャリアが種明かしされていて、復刻版ならではの味わい方ができる。

第1部の第1章は、「心理療法におけるイメージ技法」が概観されている。イメージ療法について「広義には、すべての心理療法はイメージ療法であるといえるが、狭義にはイメージ療法とは、このような種々の条件下で思い浮かべた視覚的イメージを利用した心理療法の総称である(p.34)」と定義し、精神分析、ユング心理学、ヨーロッパで発達したという誘導イメージ、行動療法、自律訓練法の中にイメージ療法が使用されてきたことを紹介している。系統的脱感作法が現実刺激の代理としてイメージを用いることに対して、編著

者は、イメージが現実の代理となる刺激ではなく、イメージ自体が条件刺激となって不安や恐怖が生起すると考える方が良いと記している(p.51)。

第2章は、「イメージの治癒力」として、視覚イメージを利用する心理療法に共通している治癒原理を論じるという目的で書かれている。本章は、現在、著名な臨床家となっておられる編著者の若かりし頃の実践を垣間見られて、丁寧な説明や考察ともに興味深く読み進めていける。本邦におけるイメージ技法は、編著者が指導を受け、催眠を用いたイメージ面接を論じた監修者である成瀬(1959)の研究が始まりであると考えている(p.57)。また催眠法や自律訓練法を導入する際の説明の仕方などは参考になるだけでなく、抵抗処理に対する関わり方が催眠を実践する専門職に共通に特有の言い回しであるようにも思われた(p.60)。イメージの中に、テーマやストーリーの変化といった「イメージ内容」とイメージの思い浮かべ方(浮かび方)といった「イメージの体験様式」という2つの側面があることを指摘して、体験様式の変化がイメージ面接が上手く進む中で認められることに言及している(p.68-69)。この論点は体験治療論(成瀬,1988)と呼ばれる考え方の萌芽であるともいえそうで、類似したアイデアが同時期に示されていて関心を惹く。「イメージ拒否」「イメージ拘束」「イメージ観察」「イメージ直面」「イメージ体験」「イメージ吟味」「イメージ受容」という表現を変えてその用語の意味を「体験様式の変化」を切り口に考察を掘り下げていく所を読み進めていて、編著者が「壺イメージ療法」を創始して独自に展開してくる上で適切な表現や用語を見いだす工夫と喜びが伝わってくるようであった。さらには章の終わり(p.77)になって改めて行動療法の系統的脱感作を創始したウォルピの説明に対して、編著者が夢を含むイメージ療法の立場から体験治療論を持って切り込んで疑問を呈している所にその自信が窺えた。

第3章は、「壺イメージ療法」として本書の主題ともいえる章である。前章を受けて体験様式の変化に注目して論が進み、壺イメージ療法の始まりと適用対象の展開がまとめられている。禁忌とされていた境界例、統合失調症といった重篤な精神疾患と考えられる対象にイメージ療法やフォーカシング、夢分析といったアプローチを適用した報告を踏まえて「筆者の経験からいっても、重篤例一般に有効であるとはいえないまでも、場合によってはこれらの方法が効果を上げることがあると思う(p.84)」として、イメージ療法を慎重な姿勢を持ちながらも禁忌と言われる対象に適用を試みる前に「安全弁」と「より全体的・根本的なイメージ界の再編成」を備えるアプローチによって「舞台づくり(p.85)」をして挑もうとする編著者の姿勢が多くの臨床家にも大いに参考になると思われた。昨今、エビデンスに基づいたガイドラインが作成されている。ガイドラインが有益であることは否定しないが、評者は、ガイドライン(導線)から外れることを恐れて、時に絶対視してしまって過度に慎重すぎる実践に陥ってしまう臨床家がどこかに存在するのではないかと懸念を持っている。ガイドラインは文字通り指針なので、細い「線」ではなく個々のクライアントに合わせて対応していく「幅」を持って、有益な支援を行うためのものである。本書からガイドラインの活用の仕方について、「考えた上で実践を行うこと(考えながら実践を行うこと)」の肝要さを改めて気づかされた。編著者によって臨床活動の合間に考えては、実際に適用していくという試行錯誤の中で「壺イメージ療法」が遂に考案される(p.85-86)。

「壺イメージ療法の標準的手続き(p.86-98)」では、その手順を明示することで、多くの臨床家が参考にでき、その実践を再現できるようにした。言い換えるならば、本書で7つの

段階にわたる手続きを段階毎に具体的な言い回しを含めて明確に示したことが、その後の「壺イメージ療法」の認知度の高まりと広がり、そして高評価につながったと考えられる。討論に入って、「壺イメージ療法」が「舞台」に上がるのではなく、冒頭で示した著名な先達の前で「まな板」に載せられる。新鮮な食材が、熟練の料理人たちによって調理がなされて、あたかも料亭で提供される食事を味わうような展開が堪能できる。また境界例への適用事例も討論の中に挿入され「壺イメージ療法」が広範囲に適用可能であることを示している。

第4章では「壺イメージの経験から」となっており、催眠に関心のある人にはもちろんであるが、特定のアプローチよりもむしろ、ブリーフサイコセラピーや統合的アプローチに関心を持つ専門職に資する密度の濃い内容を提供している。

第2部では、今となっては名高い臨床家が個々の工夫を盛り込んでの持ち味を活かして、境界例、心身症、登校拒否、夜尿症、自己臭といった広範囲の適用がなされた事例が報告され、章毎に討論が行われている。

第3部では、他章の討論とは別にコメントがまとめられており、「壺イメージ療法」を立体的に捉える補助線となっている(補助線ではなく、単独で読んでも読み応えがあるのと言うまでも無い)。

本書を評しながら改めて考えたのは、フロイトやユング、アドラー、エリクソンに代表されるような「カリスマ」が21世紀以降の心理療法の業界に登場することは起こりにくいと思われた。今後は、個人名よりもむしろ論文や書籍を通じて、実績やエビデンスが知れ渡り、「壺イメージ療法」「臨床動作法」といったアプローチや技法の名称が手続きとともに継承されていくようになっていくのであろう。とはいえ、執筆者やアプローチを開発した方の名前はしっかりと刻まれるに違いない。

引用文献

成瀬悟策 1959 催眠面接の技術 誠信書房

成瀬悟策 1988 自己コントロール法 誠信書房

(東洋英和女学院大学 長谷川明弘)

以上。3741文字

規定文字は25×150行 3750文字